

「佐分利公使の死（重光葵）」を読んで

（元スイス大使）岡田 晃

終戦の時、駐中国大使は谷正之、公使は堀内干城。「重光葵文書」に、谷正之支那課長（当時）堀内干城領事（当時）として、しばしば、名前が出てくる。

谷大使はスグA級戦犯として巣鴨プリズンにつれていかれ、堀内公使が後を引きうけて、終戦後の在中国日本人の引揚げとか、在中国・日系企業財産の中国側への引継ぎなど一切の終戦事務の責任をもって処理された。

つい昨日まで支那派遣軍の軍人がサーヴェルをジャラつかせ、肩で風を切り、人を人とも思はぬ横暴をきわめていたものが、ヒッソリと逃げかくれして、一日も早く、日本に、一市民として逃げかへりたいと狼狽していた。一般の邦人は全て中国側の指定する集中營に集団生活を強いられ、引揚船のくる日を待ちつづけていた。

堀内公使は、国民政府・宋子文総理との特別な個人関係から、同総理の特別顧問として、上海狄思威路に住宅、ジープ車などを与へられ、上述の仕事に従っていた。私は当時、中国大使館の外交官補で南京大学の留学を終ったばかりであったが、終戦と同時に、大使館に勤めていた一切の中国人は去り、ボーイから、女中など誰一人として使用人がいなくなったので、堀内公使の秘書兼通訳兼運転手兼小使として、堀内公館に同公使と同居することとなった。

堀内公使と宋子文総理の話し合いなどで、歴史的記録にとどめておいた方がよいと考えられた点などは拙著『水島外交秘話』（中央公論社）及び岩波新書『香港』に書き留めてある。

ここでは重光葵「佐分利公使の死」についての実情を同公使から直接聞いたことを書き留めておくこととしたい。

幣原外相（第一次）時代、北京特別関税会議に事務

総長として出席した佐分利氏は、当時、同会議に事務方として出席していた堀内氏を認め、その後、佐分利氏が駐ソ連大使に内定していたのを取止めて、1929年10月4日に、駐中国公使として上海に赴任してきた時以来、堀内氏を使っている。特に、佐分利公使が上海着任以後、南京、漢口、北京、天津と旅行し、東京に帰り、幣原外相と打合せをする時も常に同公使と行を共にしている。

終戦となり、軍の厳しい統制・緘口令がとけ、ユックリした気持で、小使い代りの通訳たる私に堀内公使は胸につかへていた思い出を語った。

佐分利さんは一般に自殺したということになっているが、あれは絶対に自殺ではないよ。

僕（同公使）は、佐分利さんと中国を旅行して廻って、東京に帰ってからも終始行動を共にしていた。前の晩（1929年11月28日）も、箱根富士屋ホテルで夕食を共にしている。佐分利さんは翌日はゴルフをするというので、僕は東京に帰った。

トコロが翌朝、佐分利さんが死んだというのである。僕は早速、飛んでいった。地元の警察などが来ていたが、外務省関係者では僕が一番最初につけつけたのだ。

死体を見て、まず、おかしいと思ったのは佐分利さんの頭がピストルで打ちぬかれているが、弾丸は左から右に抜けている。そして佐分利さんは右手にピストルを握っている……。

部屋の様子は片づけられていたが、昨夜と変りないし、勿論、遺書などは一切ない。

そうしているうちに、遺品の荷物などを片付けていたら、佐分利さんが日頃自慢していたピストルが彼の鞆の中から出てきた。とすると、今、彼が握っているピストルは誰のものか？……

そのうちにホテルの従業員、警察の外に憲兵などがドヤドヤと入ってきた。

僕は公使の後かたづけなどをして帰ったが、遺体は29日午後外務省に運ばれ、30日、帝大病院で解剖された結果、「自殺」と断定された。

更に、僕には何故、佐分利さんが自殺しなければならなかったのか？ 全く理由が判らない。奥様も亡くなられていたし、子供さんもいなかった人が、もし、自殺するのなら、たとへ遺書はなくても、前夜、一緒に愉快に夕食を共にしていた僕に何か一言ぐらい不平や不満を述べている筈ではないか。佐分利さんは駐ソ連大使の栄職に内定してたのをふり切って、公使の地位に甘んじて、中国との関係改善に身を捧げようと、ハリキっていた。上司は最も彼を信頼していた幣原外相である。

あの日も、彼は幣原外相と会ってきて、特に何か不満、不平を述べるでもなく、中国との今後の外交についての彼の抱負を述べていた。……

このようにハリキっていた、また、誰からも輝かしい前途を囑目されていた、51才、働き盛りの公使が自殺するなんていうことが、ありうることだろうか？ あれは絶対に他殺だよ!!

時は正に張作霖爆死事件の直後。田中内閣は総辞職して、浜口内閣ができ、1929年7月9日中国の不平等条約撤廃要求に対する日本政府の友好的政策が発表された直後である。

この幣原外相の新中国政策に反対する軍部・右翼の勢力が強大だったことは、その後の日本の対中国侵略史をみるとハッキリと浮び上がってくる。そして佐分利公使はこの幣原外交推進の先兵だったのである。

そこで重光葵「佐分利公使の死」にもどろう。「彼の孤独性は恐らく生れつきのもので……真に腹を割って話す方の性質でもなかった。……子供のなかったせいかもしれぬ。夫人は外相・小村寿太郎侯の令嬢であったが、夫人が北京で客死された時の彼の悲嘆はほとんど眼も当てられなかった。その悲嘆が続いた。これは

彼の孤独感を一層強くした近因であったに違いない。……」とし、他面、「外務省首脳がロンドン軍縮会議の準備に忙殺されて、幣原大臣をはじめ彼とゆっくり話をする暇もなく」持前の孤独癖をつのらせて思い余って死を選んだのである。「幣原外相はまだ自殺か他殺か判らぬと云っているようだが、他殺の模様はない」「自殺するとは余りにも情ない」と書いている。

この重光文書が何時の時点で書かれたものか明かでないが、同文中、佐分利公使と蔣介石との南京での会晤の模様とか、佐分利公使が東京へ帰国後、「度々、帰任を促す電報を発した」とあるから、凡らく重光氏は上海又は南京にいたのではないかと察せられる。トすると、彼の自殺説は日本からの公式ニュースに基づいて、自分の佐分利氏の性格判断を交へつつ憶測したものであろう。果してこれは歴史の検証に堪えうる「事実」であろうか。

これに対し、幣原喜重郎『外交50年』（中公文庫）はハッキリと他殺説をとっている。上述の堀内公使が終戦後、憲兵の暗黒政治がなくなって自由になって始めて私に語ったことと全く同じことが書かれている。私は堀内氏が幣原外相にこの真相を報告したか否か聞きたさなかったが、幣原・堀内の親密な関係から多分これは伝へられたものとみている。

外務省公刊の『外務省の百年』には帝大病院の解剖結果・自殺との断定と幣原外相の他殺説が並列して記されている。

なお堀内氏は上海総領事館において重光公使（当時）の最も信頼された部下であり、「隻脚公使(4)・爆弾前後・重光蔵」の中で重光公使が被弾して倒れた後「堀内来り、はげ頭見る。これで堀内君だなど思はる」と語ったとされている。なお堀内氏はゴマ塩頭だが、はげ頭ではない。重光蔵は葵の弟で、私の学生時代の国際法の先生である。